

# 吉川高校よ、さようなら。98年間ありがとう

## 新潟県立吉川高校で閉校記念式典

吉川高校の閉校記念式典が10日午前9時半から行われました。会場となった同校の体育館は在校生を中央前列に、同窓生、元教職員、来賓など約400人の参加者でうまりました。参加者は同校の歴史を振り返り、閉校を惜しましました。

同校が開学したのは明治43年の5月でした。来年の3月に卒業する生徒を含めると、9805人の卒業生を送り出したことになりました。式典では、挨拶や講演などで同校の歴史と伝統を確認させてもらいました。そして卒業生



たちが地域で、日本で、世界でいかに頑張ってきたかを知ることができました。

学校長である山田豊先生の式辞は1ヶ月もかけて推敲されたといえます。「吉川高校は頸北の一大コミュニケーション・文化センターとしての役割を果たしてきました。いつも地域と一体となって、地域と深い交流をしながら地域に根ざした教育を展開してきました。新潟県の教育の歴史に個性あふれる学校として永遠に書きとどめられるでしょう。吉川高校よ、あなたは雨の日も風の日も雪の日も私たちをじっと見守り続けてきました。吉川高校よ、さようなら。98年間ありがとう。私たちはあなたの黄金の微笑を忘れない」。心のこもったすばらしい内容でした。

山田先生が式辞で言われた同校の歴史と役割を各種歴史資料を存分に使って示してくださいました。元東北大学教授の竹内昌昭さんの講演でした。パワーポイントを駆使して、農産物品

評会



写真上は壇上で校歌を歌う在校生と式典参加者。下の写真は竹内昌昭先生の講演で映し出されたスライドの一部。

やスキークラブの活躍など懐かしい写真や新聞資料などを映し出したのは話は分かりやすく、ぐいぐいひきつけられました。私も数年前から付き合いをさせていただいていますが、とても研究熱心な方で、不明なところが出てくると、とことん調べる学者さんです。この日の講演でも、ここまで調べてくださったのかと思うことが何回もありました。たとえば、日本学校農業クラブ、昭和25年11月に東京は日比谷公会堂で全国結成大会が開かれましたが、そこに参加した吉川高校の生徒は10人で、全国でもっとも多かったことを初めて知りました。そして参加者がうなったのは、校門のそばで85年間、同校の生徒を見つめ続けていた樹木、ヒマラヤシダの話でした。この木は今年の2月の強風で傾き伐採されたのですが、その年輪の画像を示し、年輪幅に影響を与えた冷夏のことや学校の歩みを語られたのです。感動でした。

## 20万キロ以上走行救急車が3台も

先月30日に開催された上越地域消防事務組合全員協議会で救急車配置の実態と整備計画が示されました。

それによると、管内に配置されている救急車は全部で11台。上越南、上越北、新井の各消防署に2台、他の消防署、分遣所には1台ずつ配置されています。

驚いたのは救急車の走行距離でした。11台のうち、20万キロメートルを超えているものが何と3台もあったのです。組合消防整備計画では、とりあえず26万キロを走っている1台を更新することになっていますが、これでいいのでしょうか。消防予算を充実させないといけないと思います。



NO 1321  
2007.11.18

発行・編集 日本共産党上越市議 橋爪法一  
Tel 548-3628 (有線) 4867  
E-mail hasiznyg@ruby.ocn.ne.jp  
URL http://www.hose1.jp/

五月に入院した柏崎の義父はおかげ様で退院後、順調に療養生活を続けています。ただ酸素ボンベなしには生きていけないので、これまで、なかなか外に出ることができませんでした。というより、出ようとしないので、これまで、なかなか外に出ることができません。義父を外に連れ出そうという話が義兄などから出て、すぐに話がまとまりました。近くのホテルに義父母を連れて行き、妻のキョウダイ全員と連れ合いが一緒になって懇親会をやる。酒を飲む以上は泊まる。それだけの単純な計画です。話がまとまってから一〇日くらいで実現しました。

義父にとつては半年ぶりの外出です。ずっと楽しみにしていたのでしようね、ホテルで見た義父は終始、満足そうな顔をしていました。ホテルでは、私よりも一足早く着いた義兄たちが酸素吸入に必要な機器を部屋に運んでくれました。私はその日、一日中、会議などでバタバタしていて何も手伝いできなかったのですが、たまたまもらったサルナシの完熟した実を持参したところ、それが大当たりでした。

海の見える部屋のひとつに、この日の旅行に参加した七人全員が集まり、さっそくお茶飲みとなりました。持ち込んだお菓子などがコタツの上に並べられた時、「これ、何だか知っている？ 食べてみて……」紙に包んだサルナシを広げて声をかけると、私と妻以外のメンバーは、何だろるかと思いつきながら、口の中に入れました。

みんながすぐに言いました。「美味しいね。何ていうの、これ」「生まれて初めて食べたよ。柏崎にはないよな。こういうの」小さい実でありながら、口の中に広がる甘酸っぱさに驚いたのでしょうか。それからしばらくの間、どこで採れたのか、ツルか木かななどと私はたくさんさんの質問を浴びることになりました。珍しいものを持ち込む、たつたそれだけでこんなにも喜んでもらえるとは思いませんでした。

私もサルナシの存在を知ったのは数年前のことです。中学時代の先輩たちが、この実を使ってワインを作る計画を持っていると聞いた時が最初でした。尾神岳の山の中や川谷方面にある「野生の実」で、キウイフルーツの原種だと聞いて、どんなものか知りたくて凶鑑を持って山間部を（実際には平場にもある）歩きました。

田んぼの土手でサルナシのツルを見つけた時はうれしかったですね。葉っぱや白い花は生まれて初めて見たものでした。そして、その年の秋には緑色の実を自分で採って食べました。その時の感動はいまでも覚えていますが、義父などが高い関心を示したのは、よく分かります。

夕食後、夜遅くなってから、ホテルの部屋の壁をいっぱい使ってスライドを上映しました。今年の夏、柿崎海岸で見た夕陽、数年前に群馬県や長野県へ家族旅行に行った時の写真、野の花の写真を次々と映し出したところ、みんな乗ってくれ、スライド上映は三時間にも及びました。懐かしい写真が何枚もあったことや義兄が野の花を好きだったこともあって、話はつきませんでした。

最後に映し出したのは、このホテルでの義父の姿です。サルナシを前面にして義父を後方にした写真でした。サルナシは小指の頭くらいしかないのに、写真ではニワトリの卵ほどの大きさに見えます。カメラを意識したのでしよう、そのサルナシを前にいくぶん緊張した表情で写っていました。写真は夕方撮ったばかりです。義父は、「もう映せるのか」とびくりしていました。サルナシにたいへん興味を示した義父ですが、来年は生っている現場を見せてあげたいものです。

## 大きなカブや「いもご」も出品 源地域づくりが今年も農産物品評会

区内各地で秋上げ行事が盛んです。そのひとつ、源地域づくり会議が主催した「秋上げ みなもと2007」は11日、旧源小学校体育館を会場にして開かれました。

内容は、カーリングやペタンクなどのレクリエーション大会、農産物品評会、花いっぱい写真展と盛りだくさんです。

このうち、農産物品評会は伝統のある取り組みで、今年も白菜、ニンジンなどの野菜や柿などが並びました。話題になったものは、直径20センチはある大きなカブ、小指ほどの大きさの天然の「いもご」など



です。「どういう品種かね」「よく、こんがにでっけがを見つけたもんだ」などという声が聞かれました。



## 呉汁など吉川の料理、特産売込み

第8回「郷土料理とバイキングを楽しむ会」が高田で開催され、600人を超える参加者がありました。

今回は吉川区と三和区が郷土料理を紹介する当番でした。吉川区の食推の皆さんなどが用意したレシピに登場したのは押し寿司、柿の白和え、呉汁など8つ。参加者からは、「美味しいね」「懐かしい」などという声がたくさん出ました。特別栽培米やワインなどもどんどん売れました。（写真は14日、デュオ・セレッソで）